

<書評論文>

液状化する近代と廃棄された生

Zygmunt Bauman⁽¹⁾,
Wasted Lives: Modernity and Its Outcasts⁽²⁾
 (Polity Press, 2004)

森 田 次 朗

はじめに

ジークムント・バウマンは、わが国では『リキッド・モダニティ』の著者であり、ホロコースト研究をはじめ後期近代やポストモダンに関する議論で知られたポーランド出身の社会学者である。彼は、近年ではグローバリゼーションに関する著作を出しているが、その著作を通して貫かれている問題関心とは、「近代とは何か」という問いに代表されるように思われる。彼は、今日の時代状況を「液状化した近代（リキッド・モダニティ）」とよび、従来の「堅固」で「重厚な」近代社会（前期近代社会）と対比させる（Bauman 2000=2001）。リキッド・モダニティにおいては、制度や価値観などが流動性の中におかれることになる⁽³⁾。

本書は、こうしたリキッド・モダニティにおける「廃棄」、とりわけ廃棄された生の有りようについて書かれた著作である。このような生は「廃棄された人間（wasted human）」や「人間廃棄物（human waste）」とよばれる。今日環境問題への対策が声高に叫ばれて

⁽¹⁾ 1925年生まれ。リーズ大学・ワルシャワ大学名誉教授。

⁽²⁾ 山田昌弘は、本書のタイトルを『使い捨て人生』と翻訳している（山田 2004）。たしかに、山田の議論のように現代日本社会における「二極化」の進行という観点から、厳しい生活を強いられるフリーターやパラサイト・シングルなどという対象をよび表すのにさいしては、この表現はふさわしいように思える。しかし、バウマンの議論自体においてはあくまで難民や移民といった対象に力点がおかれており、こうした対象を論じるにあたり「廃棄」という言葉の方がより適切だと考えたため、本稿タイトルのように訳すことにする。

⁽³⁾ ここで注意すべきは、「液状化」という言葉の含意としては、束縛や義務などから解放されたという意味での「軽さ」が強調されかねないという点である。しかし、彼自身はこのような議論を意図しておらず流動化という言葉を安直に解放ということに結びつけはしない。

いるわけだが、バウマンは単に物質的なレベルを越えて、いかにリキッド・モダニティが「廃棄物」を生産する装置に依存しているかについて分析する。

1 本書におけるバウマンの論点——近代と廃棄物——

論点の整理にはいるまえに、本書の構成を確認する。本書は全体で4章からなっている。まず第1章では、本書のキーワードである「廃棄」についておもに理論的な観点から説明がなされる。そのさい重要となるのが、近代における「線引き」の問題である。つまり、バウマンによると、近代（前期近代）においては「内」と「外」とをへだてる「境界」（秩序／混沌、有益／無益など）が掘りくずされながらも巧みに維持されていた。しかし、リキッド・モダニティにおいてはこの「境界」がきわめて曖昧化してきているというわけである⁽¹⁾。廃棄の問題は、こうした線引きをつうじて生みだされる（第1章）。次に前章で示された廃棄物について、第2章以降で大きく2種類のものが具体的に提示される。1つ目は経済的な発展にともない生じた移民（第2章）と法的な秩序の外へと放出された難民（第3章）とに代表されるいわば極限状態におかれた存在である。2つ目は被雇用者や消費者のようなより「日常的な」存在である（第4章）。バウマンは、前者と比べると後者については掘りさげて議論をしていないように思える。しかし、この問題は今日の日本社会における社会問題と関連するテーマとして興味深いものであるために後ほどあらためて考えてみたい。

以下、論点を3つにしばって論じることにする。

1.1 「線」を引くこと⁽⁵⁾

バウマンは、近代においては「世界が変化可能」だとみなされ、同時に変化し続けることが強迫観念化されていると考える。いいかえるなら、近代とはいかなる理由があれ同一の状態であり続けることがことごとく拒否される時代だというわけである。しかし、その変化とは単に現状とは異なる状態へと変化することを意味しない。そこでは、未来に向け

⁽¹⁾ このことを端的に表すのが、バウマンが用いる「失業（unemployment）」と「余分・余剰（redundancy）」という言葉の対比である。前者の失業に関しては雇用状態という「正常な」状態が前提とされているため、この「正常」な雇用状態へと復帰することが想定されている。つまり、「再利用」の可能性があるために失業という「異常」な状態は一時的なものだとみなされうる。これに対し、後者の余剰に関してはそうした反意語が想定されず、ひたすら余っていることが意味される。そして、余剰労働者に対しては理由づけや説明のないまま解雇がなされるというわけである。

⁽⁵⁾ “In the Beginning Was Design: Or the Waste of Order-Building”（本書1章）に対応。

て変化すること、バウマンの用語を使えば厳密に計画された「設計（デザイン）」に基づきながら秩序を建設していくことが目指されるのである。そして、一度描かれた設計図は次の設計へと利用され、この循環は永続的に行われていく。しかし、このような設計とはあくまで将来的にありうるだろう状態を想定して行われるために、「描かれたもの」と「実現されたもの」とは完全に一致することではなく、両者の間に「ズレ」が生じることをどうしても避けることができない。このため、こうした未来の不確定性を克服すべく過剰な設計が生みだされることになる。なぜなら、この「過剰さ」のおかげで設計による想定が外れてしまう危険性を軽減させることができるからである。つまり、本来実現することを合理的に計算しているはずの設計は、その実現を目指すのがゆえに逆説的に実現不可能な要素を引き受けてしまうというのだ。この点において、近代においては原理的に「過剰なもの」が生産され、それが「余剰なもの」として滞ってしまう可能性が生じる。

ここからさらに、バウマンは余剰なものが廃棄物として処理されるプロセスについて説明する。しばしば言及されることだが、バウマンもまた近代化とは近代化されていない領域（「外」、「空き地」）を近代化させることで存続していく、絶え間ない運動であるととらえている。このさい「空き地」を近代化させてしまうことは、同時に近代化という運動にとって自らが存続するための条件や基盤を切りくずしてしまうことをも意味する。これをバウマンの言葉で表現するなら、「みずからの尾を食い尽くしていく蛇」のようだというわけである。このプロセスが進展するにつれて次々と「外」は「内」へと変換させられていく。このさいきわめて重要な事態が生じる。それは、この「外」が「内」へと変換していくプロセスにおいては、同時に「内」で生じた余剰なものが境界を維持すべく「外」へ追いやられていくのである（廃棄物化）。なぜなら、余剰なものは「余剰」であるがゆえに「内」における秩序を侵してしまいかねないものだからである。

ここで注意すべきなのは、バウマンがそもそも物それ自体に「有用／無用」という区別が内在しているわけではないと指摘する点である。つまり、廃棄するという行為よりも先に「無用なるゴミ」が存在するわけではなく、いわば廃棄するという行為があってはじめて廃棄されるべきものが誕生するというわけである。先の議論でいえば、現在存在しているものは、内容はまったく問われることなくただ「今・現在」存在しているというだけで廃棄物となりうるのである。そのため「有用／無用（内／外）」という境界は暫定的なものでしかありえない。したがって、「有用／無用」を区別している境界はたえず更新する努力が必要とされその努力を少しでもおこたると、「外」が「内」へと流入してくる。ただし、いったん線が引かれれば今度はこの境界線を維持する作用が働くために、廃棄物を処理しようとする営み自身がさらなる廃棄物を生み出すというような連鎖反応が引き起こされる。

1.2 グローバリゼーション⁽⁶⁾

こうして、近代（「堅固な近代」）においては、内と外、秩序と混沌との分離がきわめて技巧的に遂行されたわけである。そして、この機能を独占的に担っていたのが国民国家である。

しかし、この線引きはグローバリゼーションの作用により大きな変化を強いられる。バウマンは、グローバリゼーションを近代化の流れが世界のすみずみにまで拡散していく現象としてとらえる。つまり、空間として余剰物を蓄積しておくだけの「空き地」はもはやなく、近代化の進行具合に応じた「時間差」も存在しないわけである。この一見すれば「外」が消滅した状態、つまり「世界が満杯」になった状態が現代の時代状況（リキッド・モダニティ）である⁽⁷⁾。ここで、「一見」外が消滅したと言及したことには理由がある。それは、線引きされた「境界」それ自体が完全に消滅したわけではないからである。バウマンが注目するのは、グローバリゼーションの進展という文脈のもと一方で国家がその統治権を衰退させているにもかかわらず、他方でその権力の健在ぶりを「弱者」に対する取締りをつうじて補完しようとする姿である。

この国家による「点数稼ぎ」を如実に表しているのが難民問題である。先に述べたように、各国レベルで生じていた余剰物は廃棄物として「外」に出すことで「解決」されていた。つまり、ローカルな問題が「時差」により生じるグローバルな空間（空き地）を利用することで処理されていたわけである。しかし、「外」が限りなく希薄化したことに応じて、再び元の「境界」を維持しようと国家（とりわけ先進諸国）は「外」のものが「内」へと進入することを強く拒絶する。具体的にいえば、難民を保護するという名目のもとで難民が国内へと流入することをコントロールしようとするのだ。さらに、先進諸国は難民が発生した場所の近くでそれらを保護しようとするわけであり、そこでは「安全な距離」の保持が目指される。また、当事国以外の各国が難民を保護するといった場合でも、それは一時的であることが条件とされる。その結果、いったん「外」に投げ出されて生じた難民は、まさにどこにも所属することのない真空地帯に放りだされるわけである⁽⁸⁾。

⁽⁶⁾ “Are There Too Many of Them?: Or the Waste of Economic Progress”（本書第2章）及び“To Each Waste Its Dumping Site: Or the Waste of Globalization”（本書第3章）に対応。

⁽⁷⁾ グローバリゼーションの進展とともに生じる事態としてまずバウマンがあげるのが、国際的なテロ組織の「活躍」にみられるような犯罪のネットワーク化である。彼は、こうした境界を飛び交う犯罪組織を、従来の国家機能により取り締まることはきわめて困難だと指摘する。

⁽⁸⁾ さらに事態を深刻化させることとして、難民に対する国連の人道支援が民族浄化の手助けとなりうることをバウマンは指摘する。つまり、難民発生国以外の諸国は、人道支援という国連のお墨つきのもとで難民を「片づける」ことができる。

他方、「外の消滅」は、さらなる「内／外」という区分をも生みだす。つまり、今度はこれまで「内」と見なされてきた領域の中に再び「内／外」の区別がなされるわけである。この事例として、バウマンは欧米先進諸国の都市内部において形成される「ハイパーゲットー(hypergheto)」をあげる。従来のゲットーでは、ゲットーが外界から隔離されているとはいえ避難場所としての機能を果たしており、ゲットーの生活者はそこで安心感をえることができた。また、そのゲットーから「外」へ復帰することもまったく不可能ではなかった。それに対してハイパーゲットーでは、そこにいるものは単なる廃棄の対象でしかない。

以上ここまで述べたような廃棄のありかたは、福祉国家の危機というテーマとも関連している。これまで人間の生におけるランダムな要因、つまり生まれの不平等さや不運に対して社会保障という形で国家が個人を保護してきた。しかし、今日では国家はその役割を放棄し、もっぱらその役目をセキュリティの確保に限定している。犯罪者に対する処置が典型であるように、逸脱者に対して教育や矯正を実施することは放棄される。

1.3 消費社会における生の変容⁽⁹⁾

前節で言及した難民や移民に関する問題とはうってかわり、バウマンは消費文化という観点からリキッド・モダニティにおける廃棄物をめぐる問題について分析する。ただし、ここでは人間が廃棄物化することよりも、むしろ関係性の流動化（個人化）が進行していくさいに、廃棄物化するという不安を人間がいかに感じざるをえないのかということについて力点がおかれている。

先に言及したように、近代においては変化することが至上命題とされる。そして、リキッド・モダニティにおいては不確定さが増大するため、継続するということがリスクとなる。つまり、将来において現在存在している制度や関係性が変化する可能性がきわめて高いため、現状を維持することに固執したり長期的に何か一つの行為や事柄にコミットすることは、こうした劇的な変化からとり残されることになりかねない。逆にいえば、そうした変化から自らを守ってくれる制度がもはや存在しなくなる。その結果、継続しないことこそが利点とされるようになる。たとえば、家族や夫婦関係に典型的であるようなパートナーシップについても、自動車免許のように「更新」することが想定されうるようになる。このように人間の関係性が不安定化した結果として、個人は即時的な安心を求め消費行動に走ることになる。なぜならば、消費行動に依存することで関係性の代替物を求めること

⁽⁹⁾ “Culture of Waste”（本書第4章）に対応。

ができるからである。バウマンはその例として、クレジットカードの利用による負債額の増大という現象をあげる。ただし、くり返すことになるが、バウマンは衝動的な買い物癖を、「隠れた物欲と享楽の本性の顕在化」や『『商業界の陰謀』の結果』などとしてとらえることを一面的なことだとして退ける (Bauman 2000=2001: 105)。彼はあくまでそれらを「途切れたことのない激しい不安、自信欠如の不満や焦燥感などとの苦闘」に起因していると分析するのであり、こうした欲望の充足の仕方は本来の人間関係（愛情、親族関係、友情）の代用物にはなりえないと主張するのである。

2 考察

ここでは、以上概観してきたバウマンの議論について批判的に考察してみたい。その内容は以下の4点である。

2.1 「廃棄物」の高尚さについて

1つ目に注目したいのは、廃棄物 (waste) という概念である。バウマンは、現代社会における人間廃棄物として、難民や亡命者、経済的移民を提示する。しかし、こうした事例をあげることで、廃棄物という概念を過度に限定して使用してしまうことにならないだろうか。というのも、こうした極限的な事例をだすことにより、バウマン自身が本書の第4章で指摘するようなより日常的レベルで進行する現象への焦点化が弱まることにはならないかと考えるからである。つまり、単に消費社会において人間廃棄物が存在することを示唆するだけではなく、「誰でも」廃棄物になりうるということ、もしくは「いつのまにか」廃棄物となってしまうこともまた強調されなければならないのではないだろうか。具体的にいえば、山田昌弘が『希望格差社会』の中でバウマンの議論を用いながら現代日本社会におけるフリーターなどの社会問題を分析するように、廃棄物とよばれる対象はなにも法それ自体から極限的に廃棄された難民というよりは、卑近とでもいえるような段階においても指摘ができると考えられる⁽¹⁰⁾。そしてこの日常的な廃棄物ということについて

⁽¹⁰⁾ 私は難民や亡命者の問題の重要性自体を軽視するつもりはまったくない。ただ、ここで指摘したいのは、「廃棄された人間」という言葉はきわめて高尚に聞こえてしまいかねないために、よりありふれた形での廃棄というものが見落とされてはいないかという点である。ただし、本稿で引用している山田の議論についても手ばなしで賛成することはできない。たしかに、日本社会内部において進行している事態の深刻さについて警鐘をならすという意味では、彼の議論はきわめて重要だと思われる。しかし、他方で山田が日本社会で進行する「リスク化」と「二極化」とを柱とする生活の不安定化が、グローバルな文脈といかに関連しているのかという点について詳細には言及していないように思われる。

さらに重要なことは、廃棄ということがいわゆる「自分探し」という主観的な意味づけの過程と関連しているという点である。それは、単にスケープゴートが排除されることをつうじて「秩序」がもたらされるという次元にとどまらず、排除されることが「本当の自分」を見つけるという名目のもと、いとも簡単に容認されてしまうのである。

2.2 「棄てられること」と「拾われること」について

2つ目に注目するのは、本書における廃棄の問題といわゆる監視社会や情報化社会という高度に技術的な問題との関係である。このことは、バウマンが本書の最後で提起している新旧二種類の「ビッグブラザー」についての問いかけと関連する。バウマンは、パノプティコンの装置でイメージされるような監視をしながら包摂を課す旧型のビッグブラザーに対し、本稿で述べてきたような廃棄の問題を新型のビッグブラザーによる統治であると説明する。つまり、新型のそれとは、包摂することのコストさえも拒否した露骨な排除型である。こうした二分法それ自体は、日本でもミシェル・フーコーの著作から規律訓練や生権力といったキーワードを用いて説明されることが多く、けっして目新しい議論ではない。ただし、ここで興味深いのは、バウマンが旧型のビッグブラザーはその優位を新型に譲りながらも引退することはなく、現在新旧のそれぞれによる協力関係が進行していると指摘する点である。いいかえるなら、旧型のビッグブラザーにはもはや規律を課すだけの「体力」はなくそうした抑圧がないという意味では「自由」だと言えるわけだが、その反面として「手のこんだ」矯正がなされないぶん直接的な暴力がなされうることである。こうした「義務化された包括／強制された排除」の協働関係から解放された生のありかたが存在するのかどうか自問して本書は終えられているわけであるが、この疑問はあまりにも大きなテーマであり本稿における考察の限界をはるかに超えている。ただし、一つだけ指摘できることは、たえず監視がなされる社会においてはいかにして匿名であることを確保するかが重要になるという点である¹¹⁾。つまり、廃棄されたり隠蔽されることの問題性と同時に、過剰に現れさせられることの問題性をいかに考えるかということである。

2.3 バウマンの個人観と社会観について

3つ目に指摘したいのは、本書における「個人」のとらえられかたについてである。バ

¹¹⁾ いわゆる情報化社会における匿名性の確保のされ方について、東と大澤はそれぞれ「匿名の自由」、「偶有性」という概念を提示する（東・大澤 2003）。いずれも「他でありえた可能性」について考えている。

ウマンがリキッド・モダニティにおいて肯定する生のありかたとは、そこで渦巻く流動性に対し臨機応変に対応できるだけの反射神経を備えた個人のそれである。逆にいえば、リキッド・モダニティでは個人が画一的に従うことを強要されるような規範や規則というもののはもはや効力を発揮していないというわけである。たとえばこの点について、バウマンはデュルケムの「社会」観を否定的にとらえ、かつては究極的に保持していた道徳的権威を「社会」は喪失してしまっていると述べている (Bauman 2005) ⁽¹²⁾。しかし、バウマンが指摘するように、リキッド・モダニティにおける中心的課題とは、制度や価値観がたえず変容していく中で、個人がそうした状況に対していかに「身一つ」で対処していくかという点につきてしまうのだろうか。なるほど、バウマンや先に引用した山田が指摘するように家族や労働問題というテーマをめぐるのは、個人化という観点から急激な変化が生じているとみなすことができ、この意味では「社会」とはもはや「ゾンビ」のように生きながらえるものでしかないかもしれない。また、そうした変化に対しまさに瞬発力をもって理論化する姿勢こそがバウマンの最大の魅力だと言えるかもしれない。しかしその一方で、リキッド・モダニティの流動性の中で「変わらずに残り続けるもの」は存在しないのだろうか。もしくはそうしたものが存在したとしても、重要な意義を付与されないものなのだろうか。たとえば、バウマンは前掲論文において、「社会」を主に①個人を規範的に拘束し、②予期せぬ変化から個人を保護してくれ、③個人よりも持続するという特徴をゆうするものとしてとらえている (Bauman 2005: 373)。しかしこうした見方においては、「社会」はあくまで個人から分離可能で外在的な存在としてしかとらえられていないのではないのか。つまり、バウマンは「社会」や「集合」という概念を単純化しすぎているように思われるのである。たとえば、個人はいとも簡単に自らが所属する集団に愛着をおぼえたり、さらには「故郷」や「国家」といった対象に自らを投じてしまうことがある。これらは、どれほど構築されたものだともわかっていても、そこから逃れがたいものではないだろうか。また、不確定性に耐えられない個人は、本書第4章であげられるように衝動買いというかたちで極度に消費行動に依存したり、また自助集団を形成することで生の不安定さに対応することもありうる。こうした点を考慮するのならば、今述べたような個人がおちいる依存状態やきわめてネガティブな形で生じた集団 (集合性) をどのようにとらえるべきだろうか。これらを単純にバウマンがいうところの「堅固な近代」における集合性と同一のものだとみなすことはきわめて軽率なことだが、他方でまったく突発的、偶発的に生じた現

⁽¹²⁾ ただし、バウマンが批判的にとらえるデュルケムの社会観 (超越的な社会が、個人に対して一方的・圧倒的に規範や強制力を課するというモデル) が、それ自体デュルケムの社会理論解釈として妥当か否かという評価については、ここでは留保しておく。

象だとみなして軽視することも避けなければならないと考える。

2.4 バウマンにおける眼差しについて

最後に4つ目として、3点目として述べた「社会」に対する「個人」の優位ということがらに関連して指摘したいのは、バウマンの理論に見出される「他者」という視点についてである。バウマンのように、アプリアリな同意や規範を前提せず、それにもかかわらず個人人間においてある種の調和的な状態や連帯を想定する場合、個人の対面的（相互的）場面が重要になる。つまり、あらかじめ存在する地位や役割といった資源や規則に頼らないとしたさいに問題となるのは、個人と個人が会合う場面、つまり自己が他者と会合う瞬間である。本書では、こうした「他者」として難民や移民が登場し、これらの事例を契機として「われわれ」の生のありかた、とりわけ「われわれ」の暴力性が浮かびあがる。しかし、こうした難民や移民という他者を論じるさいに注意すべきことは、認識上の独善を回避するはずの「他者」を想定するという立場もまた対象を単純化してしまう危険性と表裏一体であるということである。ここで意図しているのは、認識の独善を絶対的に回避する立場などまったくないという意味での相対主義やニヒリズムを主張することではない。より具体的にいえば、本書において提示される難民や移民のありかたが、加工され過ぎているように思われるということである。

おわりに

概観したように、本書においては廃棄物とよばれる生のありかたが描かれている。日常表現の中で罵倒の言葉としてもちいられるとはいえ、人間をいわばゴミと呼称してしまうことに対して抵抗感を抱く者は少なくないかもしれない。また、今日メディアによるニュース報道においては、テロ事件、貧困問題、自然災害などといった情報が氾濫しており、語弊をおそれずにいえば「共感に値する」ニュースにはこと欠かないように思われる。このため本書に登場する難民や亡命者、移民という対象もまた、共感の題材として扱われてしまいかねない。しかし、バウマンが意図するのは、ゴミとして廃棄された物や人々に過度の哀れみや同情をかけることでもなければ、それらを道徳的に非難することでもない。むしろ、その逆である。つまり、余剰物や廃棄物が生じる装置や構造に光をあてることで廃棄物を生じさせる線引きがもつ恣意性に言及することができ、その結果として廃棄された生における新たな生の可能性が開かれるわけである。

たしかに、本書におけるバウマンの議論は、「他者」に対するきわめて強い眼差しに基づいているようであり、こうした視点には時として「客観的な」分析を曇らせてしまう危険性があると思われる。しかし、他者への共感なくして隠蔽されているものや廃棄されたものを見ることはたして可能であろうか。本書におけるバウマンの考察は、廃棄物という概念をつうじて廃棄する側と廃棄される側との隠れた連鎖に光をあてる。こうしたバウマンの議論は、他者への共感と同時に理論的な分析も十分にかね備えている。これこそ社会学の醍醐味ではないだろうか。

参考文献

- 東浩紀・大澤真幸, 2003, 『自由を考える』日本放送出版協会。
- Beck, U. & A. Giddens & S. Lash, 1994, *Reflexive Modernization*, Stanford: Stanford University Press.
(=1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房。)
- Beck, U., 1986, *Risikogesellschaft*, Frankfurt: Suhrkamp. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会』法政大学出版会。)
- Bauman, Z., 2000, *Liquid Modernity*, Cambridge: Polity Press. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ』大月書店。)
- , 2003, *Liquid Love*, Cambridge: Polity Press.
- , 2005, "Durkheim's Society Revisited" in Jeffrey C. Alexander & Philip Smith eds., *The Cambridge Companion to Durkheim*, Cambridge: Cambridge University Press, 360-382.
- 山田昌弘, 2004, 『希望格差社会』筑摩書房。
- 三上剛史, 2003, 『道徳回帰とモダニティ——デュルケームからハーバーマス・ルーマンへ』恒星社厚生閣。

(もりた じろう・修士課程)